

## 稲泉連『復興の書店』を読む

件名と写真は11月11日発行の小学館文庫である。近所の書店で見つけ一気に読んだ。カバー裏に次のように書かれている。

「東日本大震災は、東北の書店員たちを悲観させた。岩手、宮城、福島3県の書店数の約9割、391店舗が被災。そんななか、仙台の一部の書店が営業を再開させたのは3月末である。そこで書店員が目にしたのは驚くべき光景だった。開店前から長蛇の列が連なり、あらゆる種類の本が買い求められた。同じく、苦難を乗り越えて、開店した多くの店舗で、活字に飢えているとしか言いようのない人々の姿が目撃されている。ネット注文や電子書籍が一般化した現代、街の書店、さらには紙の書籍の存在意義とはなにか？ 大宅賞作家・稲泉連氏がルポルタージュする。」



この本を手にした時、「復興の書店」があまりイメージできなかった。だが読み進むうちに震災と書店の関係、本の大切さをあらためて思い知ることになった。目次から本書の筋立てがわかる。1.本は「生活必需品」だった、2.福島に灯りをともす、3.移動書店の人々、4.ジュンク堂の「阪神」と「東北」、5.飯舘村に「本のある風景」を、6.復興の書店。被災地の書店員の奮闘ぶりが伝わってくる。

本書を読んで、震災当時の書店の様子がよくわかった。石巻には震災後に何回か行ったが、そのヤマト屋書店(あけぼの店)の店長は語る。3月31日に店を再開した。店の前にあるイトヨーカドーには、食料を求めて深夜から客が並んでいた。いまもなお食べ物の確保すらままならないでいる人たちが、果たして書店に来てくれるだろうかと思った。ところが、開店前から行列ができた。「人垣の後ろから手を伸ばして雑誌を取ろうとする人たちを見ながら、『人はパンのみにて生きるにあらず』という言葉が文字通り実感する思いでした。」

壊滅的な被害の大槌町からは書店が消え、図書館も流失した。人々が「本」に触れる場所が一か所もなくなってしまった町には震災後、全国各地から多くの絵本や漫画などが贈られた。そんな大槌町で、素人といえる夫婦が「一頁堂書店」を開店させた。大槌町役場の生涯学習課長で図書館長などを兼任する佐々木さんは言う。「書店があるかどうかは、町の文化度を表すバロメーターです。その意味では本屋が再開したのは、町の復興の兆しの一つだったと思います。」福島では原発事故の影響により、本がなかなか届かなく、書店の再開は困難をきわめた。ここにも原発の暗い影が。

小さな「街の本屋さん」で棚に並んだ本を手にするのが好きだ。本書を読んで、あらためて本の大切さ、地域に根ざす書店の果たす役割を考えさせられた。

(2014年11月18日)